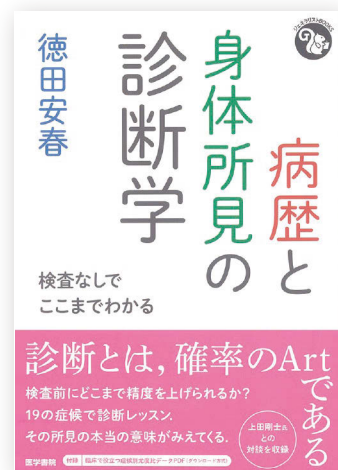




《ジェネラリスト BOOKS》 病歴と身体所見の 診断学

検査なしでここまでわかる

徳田安春＝著

定価：本体 3,600 円＋税
A5・210 頁／医学書院／2017
[ISBN978-4-260-03245-2]

開業医の貴方も“臨床の達人”に

(中高年医師の復活)

評者 中西重清 (中西内科 院長)

クリニックの外来に備えておくべき必読書が出版された。これを読破し目の前の患者さんに応用すれば、日常診療のコモンな症候に対して、検査なしで診断に迫れます。開業医も高齢化が進んでおり、読みやすい(文字が大きい)、わかりやすい、患者さんに簡単に応用できる臨床本が必要です。

ある症候に遭遇した際に、診断の肝である「病歴」を聴取し「身体診察」を行い、陽性／陰性所見を数値化し、それを合算して、診断の“確からしさ”を導き出します。数値が高ければ、診断の確からしさ(検査後確率)が高まり、「検査」は確認するだけの作業になります。検査偏重の自分から脱却できるかもしれません。たとえば、熱があるから条件反射的にインフルエンザ迅速検査、CRP検査を行う必要がなくなり、疾患の確率を考えて検査する医師に変貌できます。

第1章では、徳田安春先生(p.590)と上田剛士先生(p.575)の熱い思いが語られています。お2人とも「21世紀 適々斎塾」(大阪開催。p.553・600)の理事であり、臨床推論の達人です。本書と上田先生執筆の『ジェネラリストのための内科診断リファレンス』(医学書院、2014)があれば、開業医にとっては鬼に金棒でしょう。

第2章は19種類の各論から構成されており、コモンな症候から診断の確からしさを推測します。

「症候1」は、かぜ症状が「インフルエンザらしいか否か」についてです。当院で研修中の研修医、看護師と私で、どこまでインフルエンザに迫れるか応用してみました。インフルエンザの確定診断は、迅速検査陽性とししました。まず、「検査前確率」を推測します。流行していれば10%くらいになりますし、流行していなければ0.1%になります。患者さんの症状と所見から尤度比を導き、それらを合算します。付録の「ノモグラム」を使い、検査前確率と尤度比から「検査後確率」を算出します。尤度比が高ければ診断精度も高くなり、検査を行わなくても、結果は推測可能となります。使用方法に慣れてくると、医療関係者自身の診断確率が高まります。インフルエンザの流行時期にこの方法を繰り返せば、インフルエンザ診断の達人になれるはず。実際に当院では、「どれくらいインフルエンザらしい？」という質問に研修医が回答できるようになってきました。何度も同じ作業を繰り返すことが大切です。

インフルエンザ以外にも、「脱水」「肝硬変」「呼吸困難」「肺炎」「咽頭痛」「胸痛」「腹痛」「腹水」「腰痛」「下腿腫脹」「めまい」「手のしびれ」「手のふるえ」「低アルブミン血症」「アルコール依存」「原因不明の身体症状」が取り上げられています。これらの症候に対し尤度比算出を繰り返すと、重要な問診と身体診察が自然にマスターできます。

いやあ、医者の仕事って、本当に楽しいです。患者さんから一生懸命に話を聴き、的確な診察をすれば、自然に正しい診断ができる。これって、開業医(プライマリ・ケア医)の真骨頂だと思いませんか？ 対談のなかで、「もし本書を入門書として読めば、日本の医療の質が変わる可能性がある」と記述されています(本書p.29)。あなたも、明日から自分自身の医療を変えてみませんか！

本書を購入すれば、「尤度比一覧(診断に役立つ症状・所見一覧)」のPDFを、医学書院ウェブサイトからダウンロードできます。私は、電子カルテにPDFを置いて診療に役立てています。素晴らしい時代になったものです。